

『気落ちした者への慰め』 コリント人への手紙第二 7章1～7節 2016.5.29(礼拝説教より)

『神は、どのような苦しみのおきにも、私たちを慰めてくださいます…』 IIコリント 1:4

◆教会も信徒も「この世」にある限り、罪と汚れの支配の中にある。パウロは世俗化し汚れに染まったコリント教会を戒め叱責した結果、関係はこじれ、パウロは「安らぎを失い、苦しみ、気落ちした(5～6節)」…が、そこに神の慰めが注がれた。新たな手紙を持って遣わされたテトスより、コリント教会の人々が悔改め、万事好転！と聞いて喜ぶ！教会にも不和は起きる…が、どんなに関係がこじれても、教会は悔改めて神に立ち返り、信頼と誇りを回復される(4節)。ここが世の交わりと決定的に違うところである。

◆パウロはコリントの信徒に『心を開くように(2節)』勧めた。「狭い心」とは「赦さず、和解しない心」。「開かれた心」とは、「赦し、和解し、愛し合う心」のこと。自分の罪を認め、神を畏れて悔改め、救われることを知っている者たちこそ信用し合える群れと言える。御子をさえ惜しまず死に渡されて、救いの道を開かれた神の「和解の福音」を知るコリント教会は、パウロにとって十分に誇らしかった！罪と弱さの故に問題が起きる教会が、なお信頼できるとすれば、そこにキリストの贖いがあり、和解の福音が語られ、その真ん中に平和の君イエスがおられるからである！教会は「赦し合うことを知る者同士の集まり」である。そして、罪が赦され、救われ、キリストと結ばれてこそ、互いの愛と平和を保てること知っている…そこに信頼して交われる安心がある。

◆パウロは『どんな苦しみの中にあっても喜びにあふれ…(4節)』と語る。それは、「苦しみや試練の中にこそ喜びがある」の意。かつてはクリスチャンを迫害し殺してしまっていた自分を選び、赦し、用いられる神の愛を、彼は疑わなかった。「キリストの愛、我に迫れ(IIコリ 5:14)」！ダビデも人殺しと姦淫の罪を徹底的に悔いたとは言え、なお愛し、なお赦された神の愛を称えた『…私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来る…(詩篇 23:6)』と。「追って来る(ラ-ダフ)」とは、「敵が迫害するために執拗に追いまわす／どこまでも執念深く追う」の意。罪深い私たちを、神の恵み、その赦しと憐れみが、どこまでも執拗に追いかけて、なんとしても私たちを罪の滅びから救おうとされる神の愛。ここに苦しみの中でも消えない喜びがあり、神の慰めがある。

★今週も、気落ちするような試練の中にも、この変わらない神の愛と赦し、励ましと慰めがありますように。